

一宮研伸大学における学生ボランティア活動登録制度の導入 SDGs 活動における地域貢献を目指して

鈴江智恵¹ 肥田武¹ 増永悦子¹ 大久保清子¹

I はじめに

SDGs(Sustainable Development Goals)とは、2015年9月に国連で開催された開発サミットで採択された持続可能な開発目標である。開発目標には2030年までに達成すべき17のゴールがある。その達成には国、地方自治体と企業、市民等すべてのアクターの力と参加を必要としている。一宮市においては、2021年11月に「一宮市SDGsパートナー・サポーター制度」を企業、教育機関等に向けて公募を開始した。

一宮研伸大学看護学部(以後、本学とする)は、2021年6月に地域社会が求める質の高い看護を地域住民に恒常的に提供していくことを目的に「看護地域創成研修センター(以後、センターとする)」を開設した。その中でセンターが目標とする「地域貢献」の具現化を、運営会議において議論した。

その結果、大学として「一宮市SDGsパートナー制度」への登録をし、学生・教員が連携したボランティア活動によって、地域の保健・医療・福祉に関連した地域貢献をしていくことが方向付けられた。

このことから、センターは、17の開発目標のうち、本学の達成すべき目標を3つ選定し、「一宮市SDGsパートナー制度」に登録申請を行い、2022年1月25日に承認された。センターが達成する目標としたのは、17のゴールうち、「目標3. すべての人に健康と福祉を」、「目標11. 住み続けられるまちづくりを」、「目標17. パートナリシップで目標を達成しよう」の三つである。

本稿では、この目標を達成する学生・教員が連携したボランティア活動の円滑化を図る「しくみづくり」として、学生ボランティア活動登録制度(以後、本登録制度とする)を導入し、ボランティア活動の支援が始動できたため、ここにセンターの活動を報告する。

II 活動

1. 本登録制度導入の契機

本登録制度導入の契機となったのは、二つの学生ボランティア参加活動と参加を断念した一つのボランティアである。

一つは2021年11月29日に開催された地域住民組織である貴船連区地域づくり協議会が主催する一宮市制100周年事業の「ウォーキング大会」への参加であった。このイベントは高齢者看護学領域の教員が学生・教職員に呼びかけ、学生25名、教員3名が参加した。ボランティア内容は学生と地域住民の方が一緒にウォーキングをして、学生は参加者と交流することのほか、気分が悪くなった参加者がいた場合に、協議会のリーダーに知らせる等の役割を担った。このイベントへの参加は高齢者看護学領域の教員が築いてきた地域住民とのネットワークによってボランティアとしての参加依頼を受けたものであった。このイベントでは、地域住民に配られるイベントのチラシにセンターが後援組織として記された。

二つめは、2021年、12月19日に実施された実習施設である、なないろ訪問看護ステーションが

¹ 一宮研伸大学看護学部

主催する地域参加型イベントのボランティア活動であった。このボランティア活動は、当センターの地域連携部門を担う療養看護学領域の教員が築いた訪問看護ステーションとのネットワークによるものであった。学生ボランティアの募集は、その教員が全学年に発信し、ボランティアを希望する学生がその教員に参加の意思をメールで知らせるというものであった。ボランティア内容は当日の会場づくり、各ブースでの手伝い、来客者の誘導、利用者である高齢者・子供たちの見守りであった。なないろ訪問看護ステーションからは10名のボランティア参加を依頼されていたが、参加人数は1年生から4年生の9名、教員が2名であった。学生の参加動機は訪問看護そのものへの関心の他に「ボランティアに参加したことがなかったので、参加したかった」というものであった。また、ボランティア参加後の学生からは、「先輩たちの利用者さんへの接し方をみて、自分もあんなふうになりたい」、「地域の方々の笑顔がたくさん見られ、地域を支える看護の温かさを感じた」など、ボランティアに参加したからこそその気づきや学びを得ていた。

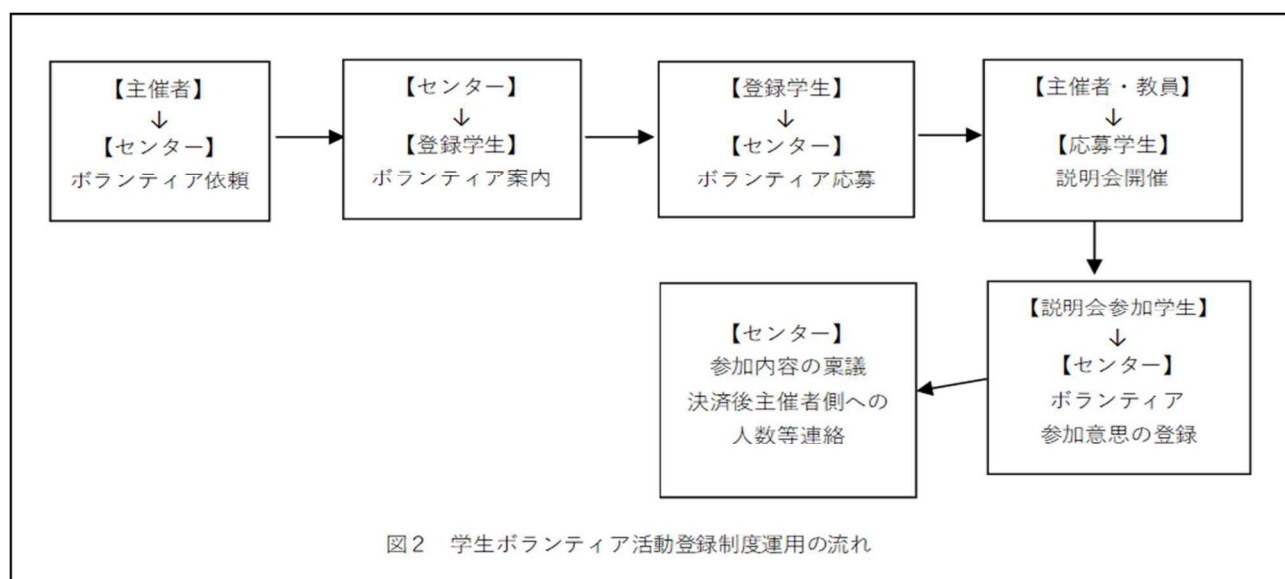
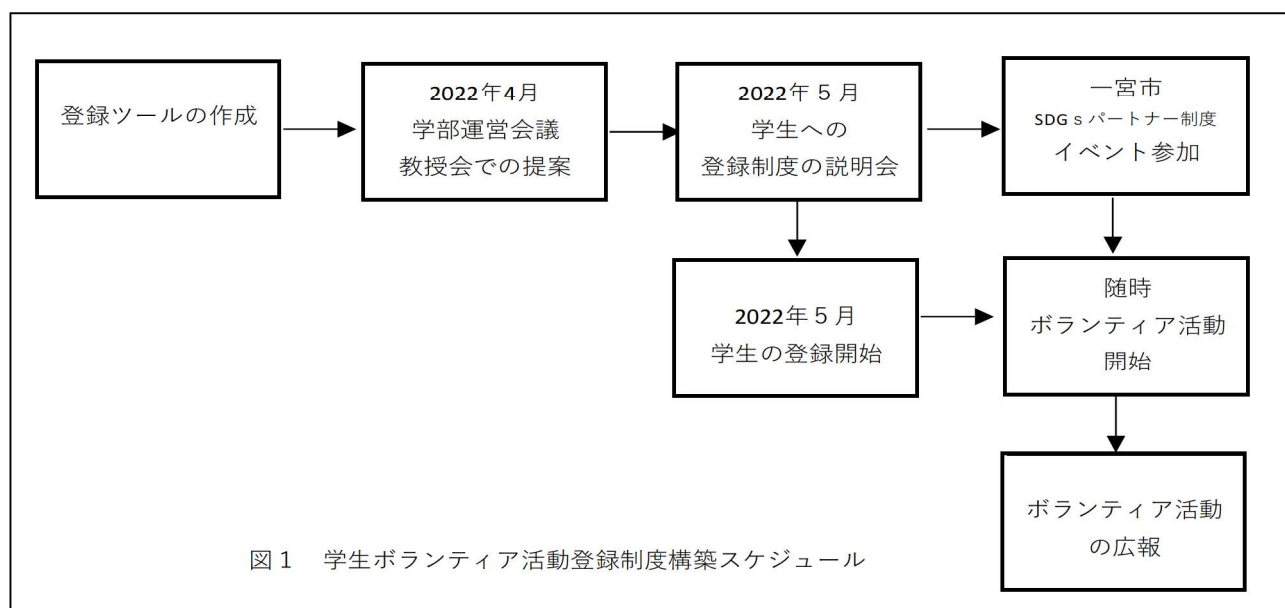
三つめは、参加を断念した社会福祉法人一宮市社会福祉協議会主催の障害福祉に関する普及啓発イベントのボランティアであった。2021年12月に高齢者看護学の教員のネットワークにより、翌年3月の開催には一宮研伸大学のブース企画も可能であるという案内があったが、イベントの参加は学生募集等、年度末ということもあり、対応が不可能と判断し参加を断念した。学生のボランティア参加は、今まで大学として関与することはなく、依頼を受けた教員が参加までのすべてに対応している状況があり、大学内の学生ボランティアに関する情報の共有は少なかった。

また、コロナ禍で主催者がイベントの開催を見合せていたため、学生は卒業するまで、ボランティアをしたくても、参加する機会が非常に少なかったという状況であった。

これらの経験から、大学として地域貢献に資するボランティア活動を支援し、学生の学習効果を高める「しくみづくり」の必要性があるとし、センターにおいて本登録制度を構築することとなった。

2. 本登録制度の構築

制度の構築をするための活動メンバーは、センターを運営委員である基礎分野の教員1名と副センター長の教員の2名が担った。最初に本制度構築のスケジュール(図1)を可視化し、センター運営会議の議を経たのち、2022年5月に学部運営会議、教授会の承認に基づき、学生に周知する運びとなった。周知方法は1年生、2年生、3年生には対面で説明会を開催し、4年生にはメールでの説明を行い、説明会後にGoogleフォームで登録者を募った。登録内容は、1)メールアドレス、2)氏名、3)関心のあるテーマの選択(複数回答可)、4)ホームページ等への写真掲載の可否についてであった。登録学生へのボランティア活動に関する情報はメールリストによって行うことになった。ボランティアの依頼の受付はセンターが行い、登録学生に情報提供を行ったあと、応募した学生に向けて主催者あるいは担当教員がボランティア活動の目的、内容を説明したうえで、参加の意思確認をGoogleフォームで行うというしくみをつくった。応募者への説明会の開催は、昼休憩の20分間で行い、講義室で昼食をとりながらも参加できるようにし、同時にZoom参加者への対応も行うこととした。応募者に説明会後の意思確認をする意図は、活動の目的を理解した上での参加を求め、ボランティア当日の欠席等がでないよう主催側との信頼関係を大切にしたいからであった。その後に名簿作成を行い、ボランティア参加者を確定した。大学がボランティア活動として承認するため、従来行っていた学生生活支援委員会への文書での届出を廃止し、当センター事務局の起案とする稟議手続きに変更した。



3. ボランティア活動の始動

1) 一宮 SDGs パートナー交流会への参加

説明会終了後の5月末には、79名の学生が登録していた。次のセンターの課題は、登録した学生がボランティア参加できるパートナーを探すことがであった。

この課題解決につながる機会は6月14日に行われた一宮市政策課が主催するSDGsパートナー交流会であった。センター事務局が参加し、多くの企業・NPO組織等の活動内容を知ることができた。目的はパートナー探しであるため、①SDGsの取り組みである「すべ

ての人に健康と福祉を」と「住み続けられるまちづくりを」が実現できること、②学生ボランティアを受け入れていること、③学生が参加できる休日に活動が行われていること、そして何よりも④一宮市の地域住民に密着した支援活動を行っている組織であることの4つの視点を持ち、条件に合致するパートナー探しを行った。その中で、支援を必要とする人々のために地域住民が支えあう活動を展開しているNPOと交流することができ、学生のボランティア参加は、自助、互助、共助できる社会のありようが学べるのではないかと期待できた。

2) なないろ訪問看護ステーションとの連携

この連携は、「看護の日」にちなんだ地域参加型のイベントのボランティアであり、昨年度に引き続いての依頼であった。募集は、センターの地域連携部門を担っている療養看護学領域の教員が行った。5月15日に開催し、そのボランティア内容は昨年と同様であった。参加に先だち、昼休憩を利用し訪問看護ステーションの所長が直接来学し、学生へのボランティア説明を行った。この当時はまだ、本登録制度の運用が不十分であり、センター事務局としての動きは、大学としてボランティア活動にする稟議に関する手続き行ったというものでしかなかった。

しかし、担当教員と訪問看護ステーションの綿密な連携から、ボランティア参加の説明会の重要性や、学生の自主的な活動を促進する準備時間のサポート等、今後の学生ボランティア支援の課題が明確になった。また、このボランティアでは、訪問看護ステーションの所長がイベント終盤に学生と利用者がゆっくり対話できるよう、場を設定して学生への学習機会が設けられた。このボランティアの経験から学生ボランティアの募集方法、十分な学生への説明、主催者との密な打ち合わせ等センターの役割を整理することができたといえる。

3) NPO 元気ふれあい倶楽部との連携

NPO 元気ふれあい倶楽部は SDGs パートナー交流会で情報交換をした組織である。子どもや高齢者、経済的困窮者、子育ての悩みがある人々等支援を必要としている人々を、住民同士が支えあう社会をつくることを目指している。コロナ禍において、無条件で活動制限される子どもたちや高齢者と出会い、子どもから大人まで参加できる多世代交流の場である第三の居場所を行政、自治体、地域住民と共につくっていくことを目指し活動している NPO である。その活動拠点は、一宮市 23 連区の各公民館であり、第 3 日曜日に定期的に活動をしている。SDGs パートナー交流会後、NPO 元気ふれあい倶楽部に連携の申出をし、本登録制度の運用方法を説明した。その後に参加を希望した学生 16 名に Zoom による説明会を行った。7 月 17 日の参加は学生と教員の 2 名の参加であったが、10 月

16 日の貴船連区での開催には、教員を含めて 1 年生から 4 年生の 7 名が参加を希望した。この開催には貴船連区地域づくり協議会、貴船連区民生児童委員協議会が協賛し、複数の企業、団体の協力があった。

4) 一宮市社会福祉協議会との連携

一宮市社会福祉協議会との連携においては、二つのボランティア活動募集が高齢者看護学領域、療養看護学領域の教員を経由してセンターに依頼された。それを受け、本登録制度の運用に則りセンターが主導し、それぞれの説明会を開催し、ボランティア参加支援を行った。

ボランティア依頼の一つは、昨年度参加を断念した障害福祉に関する普及啓発イベント「2022 福祉ジョブフェスタ」のボランティアである。参加者への道案内、ブースイベントの手伝いなどを行うことになっている。参加は学生 7 名と高齢者看護学領域の教員 1 名である。

もう一つは、医療ケア児、家族を対象としたイベント「うきうきフェスタ」のボランティアである。対象が医療ケア児であるため、学生ボランティアは直接のケアはせず、同行するきょうだいのサポート等を担当することになっている。このボランティアには学生 8 名の参加とセンターの運営委員であるこども領域の教員と基礎領域の教員 2 名が参加する。

5) 社会医療法人大雄会の大規模災害訓練での連携

社会医療法人大雄会は、初期医療から高度医療を提供している地域の基幹病院である。総合大雄会病院は愛知県災害拠点病院として、愛知県が主催する大規模災害訓練に参加をした。10 月 1 日に実施された訓練は、CSCA-TTT（災害時の効率的な医療活動を行うための基本原則）の実働訓練である。想定は 9 月 30 日（金）11 時 00 分、南海トラフ巨大地震の発生、一宮市最大震度 6 の想定で、学生は被災した模擬患者としてボランティア参加をした。参加の意義は、トリアージエリアにおける医療者の活動を学び、傷病者やその家族への声掛けや対応を学ぶことであり、参加学生の募集は、本登録制度を活用した。参加学生は 20 名であり、引率教員はセンターの運営委員を担う急性期看護学領域の教員 1 名であった。このボランティア活動

は地方紙で取り上げられているが、インタビューに答えた学生（2年生）は「災害時の負傷者は不安になると思う。今日は温かく受け入れてもらったので、対応を参考にしたい」と感想を述べており、学生が対応する医療者のトリアージや声掛けを模擬患者としてみるという貴重な体験をした。

6) 貴船連区地域づくり協議会との連携

昨年に引き続き、貴船連区地域づくり協議会「人とのつながりを考える会」が主催するウォーキング大会への参加である。このイベントにおいてセンターは、協賛組織として位置づけられており、昨年度の引き続きの参加である。学生の役割は昨年と同様であった。このイベント参加は本学と地元がつながる重要な機会であるにとらえている。センターでは本登録制度の運用に則り、参加学生の募集、地元である貴船重陽クラブとのネットワークをもつ教員による説明会を行っている。昨年は多くの学生が参加したが、現在のところ4名の参加希望にとどまっている。また、このイベントはボランティア参加以外にイベント参加も可能であるため、大学事務局から全学生への参加の呼びかけが行われている。

III 活動の結果と今後の課題

本登録制度を運用約6か月経て見えてきた活動活性化への課題は二つである。まず、一つは本制度の学生の認知度である。1年生から3年生には対面で制度の説明を行っているが、教員からは学生の認知度が低いとの声を聴いている。現在、93名が登録しているが、実際にボランティアに参加している学生は30名程度である。登録はしたが、実際に活動をしていない学生が登録者の3分の2となっている。特に1年生の参加は極めて少ない。1年生にとっては、ボランティア参加はハードルが高く、一歩が踏み出せないという状況があると推察できる。

次に学生・教員が連携したボランティア活動によって、地域の保健・医療・福祉に関連した地域貢献をしていくことと、大学が全学的に取り組むSDGs活動との繋がりがまだ薄いことである。そのためには現在、学生ボランティアに関する全般をセンターが担って

いるが、本学全体のSDGsへの取り組みを、大学としていかに具現化していくのか、今後、センターを超えた議論が必要である。

謝辞

本学の学生ボランティア活動登録制度の始動にあたり、学生のボランティア参加に理解をしていただいたNPO 元気ふれあい倶楽部、なないろ訪問看護ステーション、一宮市社会福祉協議会、社会医療法人大雄会、貴船連区の皆様、そして学生のボランティア参加の機会を提供していただきました一宮市総合政策課の皆様に感謝いたします。